

東京バッハ合唱団 月報

[第 630 号] 2014 年 12 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 630

Dezember 2014

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

— 年末・年始のご挨拶にかえて —

1945 年<8.15>以降の日本の第 2 の曲角、<3.11>から 3 年を送り、
いま 4 年目の新年(2015 年)を迎えようとする、私たち

大村 恵美子 (主宰者)

私はいま、2014 年 12 月 13 日の第 111 回定期演奏会を間近にして、まずはその日にご来聴くださる数百人の方々に、受付でお手渡しするため、そしてひきつづき合唱団に関わる全国の方々に発送して、クリスマスと新年のご挨拶とを兼ねさせていただくために、ペンを起こしたところです。

もう間もなく、マスコミでは、2014 年の 10 大ニュースがあれこれと取り沙汰されることでしょうが、それを待っているわけにはゆかないので、少し早めの年末年始の内容を、お伝えしようとしている次第です。

東京バッハ合唱団の 2014 年といえば、3 月 15 日の第 110 回定期演奏会《ヨハネ受難曲》をもって、4 年がかりの創立 50 周年記念行事、バッハの四大作品連続演奏シリーズを完結したことが、何よりも大きな業績といえましょう。そのように大規模な演奏活動を支えるべく、乗り出した「50 周年記念ファン」創設も、今年末で一段落となりますが、お蔭さまで困難きわまる世界的経済状況のただ中に、みごとな役割をよく果たし、小さなこの団体が空中分解をすることもなく、こうして次なる第一歩のクリスマス公演実現に立ち向かうことが出来たのです。

そして、これまでも何度か月報でお伝えしてきたとおり、3 年前の東日本大災害の直後から、何らかの連帯の反応を考えた私が、翌 2012 年 1 月早々に、仙台まで赴き、宮田光雄先生、川端純四郎先生、それから坂本幸生様、若松丈太郎様（このときが初対面）方とお目にかかって来たのが始まりでした。

この 2012 年は、ちょうど当合唱団の満 50 周年で、市ヶ谷の私学会館で、はなやかな懇親会を祝わせていただきました（7 月 1 日）。その前年の 12 月 3 日の第 106 回定期演奏会から始まっていた四大曲連続演奏シリーズが、

第 1 回：《ロ短調ミサ曲》(2011 年 12 月 3 日、#106)

第 2 回：《クリスマス・オラトリオ》前半

(2012 年 11 月 9 日、#107)

第 3 回：《マタイ受難曲》(2013 年 3 月 30 日、#108)

第 4 回：《クリスマス・オラトリオ》後半

(2013 年 12 月 7 日、#109)

第 5 回：《ヨハネ受難曲》(2014 年 3 月 15 日、#110)と、企画どおりに進められ、そして無事に完了したことは、言い尽くしようのない感激だったのでした。

その間にも、東日本への思いはいよいよ募りつつあり、おそらく 2012 年 1 月に仙台で心の交流を始めさせていただいた若松丈太郎様（南相馬市在住の詩人）[次ページにメッセージ] の熱いおとり計らいかと推測しま

東京バッハ合唱団 3.11 被災地訪問演奏

<福島県・南相馬公演>

— 第 112 回定期演奏会 —

<日時・会場>

2015 年 8 月 22 日（土）、開演 13:30
南相馬市民文化会館「ゆめはっと」大ホール

<プログラム>

- ・カンタータ第 92 番《わが心 思い 神にゆだねたり》
- ・(賛助出演)「花は咲く」「大切なふるさと」「故郷」
- ・カンタータ第 81 番《主イエス眠り いかによすべきわが望み》
- ・モテット《イエス よろこび》

<出演>

- [ソプラノ] 光野孝子、[アルト] 佐々木まり子
- [テノール] 鏡 貴之、[バス] 山本悠尋
- [室内楽] 東京カンタータ室内管弦楽団
- [オルガン] 石川優歌
- [賛助出演] そうま地方合唱を楽しむ会合唱団
- [合唱] 東京バッハ合唱団
- [指揮/訳詞] 大村恵美子

<入場料>

前売り 1000 円予定（発売時期等は続報）

— 合唱ツアー参加者募集 —

南相馬公演では、上記カンタータとモテットを日本語で歌います。魂そのものである母語によって、聴き手のこころの奥深くへ、バッハの生きたメッセージをお伝えしましょう。みなさまのご参加とご同行をお待ちします（1泊2日）。練習開始は 2015 年 1 月より。

当月報 4 ページに、概要。

すが、南相馬市の音楽家の多くの方々が、私たちの希望を、じっくりと聞き届けてくださることになりました。3月15日の《ヨハネ受難曲》と前後して、1月24日に第1回、5月1日第2回と、打ち合わせ会が南相馬で開かれ、その後思いがけないほどの交流が始まった経過は、この月報でも団員の加藤剛男さんが報告してくださいませ。

去る11月3日に、私は、旧来の友人、保坂展人様(団友、世田谷区長)、星野弥生様(後援会員、翻訳家、福島の子もたちと共に・世田谷の会代表)からのお知らせで、成城ホールで催された「東日本大震災被災地支援報告会(石川さゆりさん+保坂展人さんトークショー他)」に出席しました。新聞、テレビなどで毎日ポピュラー音楽界の東日本との絆のニュースを知り、一般の常識とはいくらか違う角度から、バッハ音楽を、とっつきが悪いクラシックの頂点という有難くない先入見から脱しようとする私は、ぜひ、来年8月22日と決定した私たちの南相馬公演(1109人収容の南相馬市民文化会館大ホール)にも、世田谷区内の方々の関心を向けていただきたく、この12月1日に世田谷区長とご相談することになりました。

桜上水の個人宅で1962年に産ぶ声をあげた合唱グループ(当時は私をはじめ大半が学生だった)が、「世田谷バッハ合唱団」でいいから、と言ったりしていたものですが、1983年のヨーロッパ巡演が、国賓扱いで実現されて以来、BACH-CHOR, TOKYO「東京バッハ合唱団」となり、50余年も続いてしまいました。

わが日本国土の大きな部分が自然および原発災害で半身不随となっている今、私たちは、バッハの故郷詣でを5回も重ねて、その風土に多くを学びつづけて来た足取りを中断させても(心から迎え受けてくださった、ベルリンのアジア・ミッションの長、グンドルフ・アンメ牧師が他界されたこともあり)、これからはドイツでポピュラー音楽の一形式だったコラールを母胎とする、バッハ音楽をたずさえて、とりわけ合唱に輝かしい才能を発揮されている東北の方々に、ぜひバッハをはやらせていただきたいものと、夢見て、新年を迎えます。

以前に、テレビでフィギュア・スケートの羽生結弦さんが《花は咲く》を、心をこめて舞う姿をつくづくと見る機会がありました(その後、中国杯での事故負傷をおして、大阪のNHK杯エグジビションでまたこの曲を舞い、テレビでも全国的に感動を巻き起こしました。11月30日)。そしてこの冬のシーズンには、フィギュアの曲にヴォーカル解禁となったのも、知らされました。今はポピュラー風なアレンジからとりかかっているものが多いようですが、バッハのヴォーカル曲だって、またそこから広げられて楽しいバッハの器楽の舞曲だって、ゆったりした「G線上のアリア」だって、いくらでも可能性はあるでしょう。東日本の堅実で奥深い精神は、バッハと結びつくことで必

ず爛漫たる開花を見ることになろうと、私は確信しているのです。

大きな災害を経て、世界の終り、人類の滅亡に短絡させることなく、神が友として創造された人間の、深い存在に気づき、戦後を物の欲望達成に絞りこんでのし上がったわが国の歩みを、ここでもっと正道に引きかえす大きな警告、指導と受けとって、原発だ、ミスイルだ、カジノだと倫理をはずれた馬鹿騒ぎ(ハロウインのかぼちゃのから騒ぎ)に、迷いこまず政治から、はっきりとわが道を立て直しましょう。それでこそ、心から

メリー・クリスマス! 新年おめでとう!

天には栄光! 地には平和!

と歌い交わすことができるでしょう。前途に大きな希望を!



来年の夏を、いまから心待ちしています。

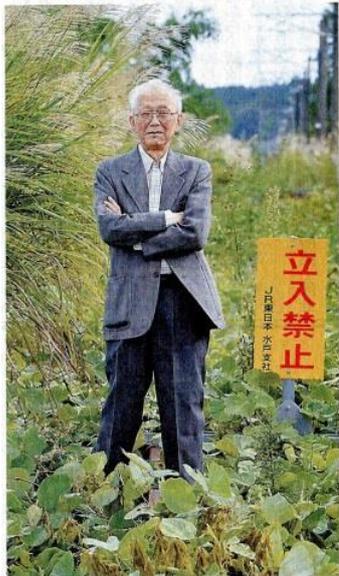
若松 丈太郎(団友、詩人)

東京バッハ合唱団の第112回定期演奏会は、「そうま地方合唱を楽しむ会合唱団」との共同企画<3.11被災地訪問演奏>として、来年2015年8月22日に、私が住む福島県南相馬市の市民文化会館「ゆめはっと」でおこなわれることに決まりました。

2011年の秋に、南相馬市の九条の会4団体が共同して、市内の早期の徹底除染を求める「除染で子どもたちが安心して暮らせる南相馬市に」の署名活動をおこなったところ、全国から1万3千筆を超える賛同の署名をいただくことができ、東京電力本社と首相官邸に提出しました。このとき、東京バッハ合唱団のみなさんの署名が代表の大村恵美子さんから届けられたことが、うれしい出会いの始まりになりました。さらに、翌年の1月に仙台市にいらっしやっていた大村さんと、坂本幸生さんのご案内によってお会いし、お預かりしたカンパを「はらまち九条の会」平田慶肇会長へお届けしたということがありました。

このような出会いをとおして、大村さんが望んでいらっしやる被災地の人びとを励ます音楽を届けたいという願いと、被災者との連帯によって現実に立ち向かう力をともに得ることができるのではないかとの思いの強さと深さを知りました。そんないきさつがあって、市民文化会館前館長の石田賢二さんを介して、東京バッハ合唱団と藤澤正孝さんを代表とする「ゆめはっと合唱団」との話し合いと具体化への打ち合わせが始められたのです。

合唱が盛んな福島県のなかでも南相馬市は他にひけをとらない存在でしたが、3.11以後は市外に避難した団員も多く、合唱団のいくつかは思うような活動がで



若松丈太郎さん。原発事故の影響で不通となったJR常磐線の踏切近くに立つ＝福島県南相馬市

「まるで熱いフライパンの上で立つているようだ。一刻も早くこの場から立ち去りたい」。放射能の怖さを初めて体感した瞬間だった。

帰国後、「神隠しされた街」という詩を書いた。強制疎開させられたフジヤチ市惨状をたっただけだ。

多くの人には三日たてば帰れるを思っ／＼ちいさな手提げ袋をもって／＼なかには仔猫だけをたいた老婆も／＼入院治療中の病人も 略／四万五

国と東京電力の刑事責任を市民が追及する「原発を問う民衆法廷」が5月、福島県郡山市で開かれた。

出廷した若松は、南相馬市の子どもたちが「いま知れたこと」の一部を読み上げた。

このシリーズは松本一弥が担当します。文中敬称略

「まるで熱いフライパンの上で立つているようだ。一刻も早くこの場から立ち去りたい」。放射能の怖さを初めて体感した瞬間だった。

主権者の国民を棄民する。私たちは「核災棄民」だ。3・11は、この国が抱えるいろいろな問題を浮かび上がらせた。来月4日には総選挙が公示される。選挙戦の行方は見通せない。だが「選挙の争点はいかにかわからず、この国で民主主義を機軸に、確かなものにしていくべき、確かなものにしていくべきを考えていきたい。」



3.11 被災地巡演、南相馬市で実現へ

加藤 剛男 (団員)

2012年1月7日から9日、新年になって直ぐに大村恵美子先生は大震災の被災地の仙台、そして6月には郡山を訪問されました。前年12月の定期演奏会を含む諸活動の中で、福島の子どもたちを守る300名の署名と10万円の支援金を集められ、それらを携えて被災地へ向かわれました。帰京されてから、先生は「3.11のダメージは、私たちが今後、一生償っても終わりません。孫子の代までかかって日本を立て直すのです」と語られました。

その年の秋になって、大村先生よりご紹介いただきました「コラール〈心よりわれこがれ望む〉」と題する詩をお書きになるほど、バッハの音楽が大好きとおっしゃる詩人の若松丈太郎様にご連絡いたしますと、早速「ゆめはっと合唱団」の団長・藤澤正孝様と南相馬市民文化会館ゆめはっと館長・石田賢二様をご紹介いただき、また資料として南相馬市民文化会館で発行している「ゆめはっと通信」および、ゆめはっと合唱団の定期演奏会チラシをお送りいただきました。

東京バッハ合唱団では3.11の直後から、演奏活動をつうじての被災地の方々との連携を模索していましたが、特別なパイプはなく、演奏会を開催するにあたってどうしたものかと思案していたところでしたので、若松丈太郎様からのご紹介はまことにありがたいものでした。ゆめはっと合唱団団長の藤澤正孝様にお電話いたしますと、東京バッハ合唱団の設立趣旨・諸活動をご理解いただき、このたびの被災地巡演企画に“できるかぎりのご協力をしましょう”とのまことにありがたい、心強いお言葉をいただきました。南相馬市には11の合唱団があり、“ゆめはっと合唱団だけでなく、他の合唱団にも幅広く呼びかけてみます”との願ってもないお話もいただきました。

その後、1月24日、5月1日、11月5日、ゆめはっと合唱団と東京バッハ合唱団との現地での3回の打合わせ会議（東京バッハ合唱団からは、大村恵美子先生始め、団員延べ7名出席）を経て、2015年8月に、南相馬市で東京バッハ合唱団の定期演奏会を開催することが運びとなりました。東京で企画を立てても、現地での実施方針については、まことに困難なことが予想されたので、ゆめはっと合唱団の役員の方々が中心になられてのご尽力があつて初めて、南相馬市での演奏会が実現することになりました。何とお礼を申し上げてよいかわかりません。

現在までに決定された概要は、「東京バッハ合唱団 3.11 被災地訪問演奏＜福島県・南相馬公演＞一第112回定期演奏会」予告〔当月報1ページ〕に掲げたとおりです。なお、11月5日現在、そうま地方合唱を楽

きないでいるようです。そこで、ゆめはっと合唱団からの呼びかけに応じた市内7団体の有志のみなさんが「そうま地方合唱を楽しむ会合唱団」を結成して共演し、東京バッハ合唱団の第112回定期演奏会に協力することになりました。南相馬市内の合唱団にとっても、活発な活動をとるもどす好機を得たのではないのでしょうか。

ほどなく、核災（核使用を原因とする災害）が発生して満4年になります。その間、「被害者づらをするな」とか「3年もすれば、だれも口にしなくなるだろう」などのことばを耳にしました。しかし、避難生活をしていると否とにかかわらず、私たちはこれまでの生きかたを変える、というよりは、捨てることを余儀なくされました。はじめからやりなおさねばならない現実、新しく生きなおさねばならない現実のなかにいます。ながい将来を見据えて、価値観の転換を図らねばなりません。そのためにはあつたことを忘れ去ったり、なかつたことにすることはできません。復旧とか復興とかいわれる次元の問題ではないのです。このような状況のなかでバッハの音楽を聴くこと、そして、発せられるメッセージを受けとめることは、私たちが新しく生きなおすための力となるものであるはずだと、私は信じています。

来年の夏を、いまから心待ちしています。

筆者：若松丈太郎さん（上掲写真、「朝日新聞」2012年11月19日夕刊掲載の「ニッポン人脈記」に紹介された）

1935年、岩手県奥州市生まれ。1962年から南相馬市に定住。高校の国語教師を34年間勤めた。1971年に福島原発が稼働してから、原発の危険性と原発に取り込まれていく地元住民の苦悩を、評論と詩で警告・告発し続けてきた。1994年にはチェルノブイリを訪ね、30km圏内の町や村も訪ねた。帰国後、福島原発から25km地点である南相馬市が原発事故後どうなるかを予測した「神隠しされた街」を含む長編詩「連禱 かなしみの土地」を書き上げる。現在も南相馬市に在住し、地元の現状とそこで暮らしている心情を書き続けている。『福島核災棄民 ― 町がメルトダウンしてしまった』コールサク社刊の帯より）

しむ会合唱団には、131名の参加申込みがあり、本番を迎えるまでに、合同の練習が5回実施される予定だということです。

私も事前打ち合わせ会議に2回出席いたしました。高速道路を車で下りて、途中の一般道を走りました時に、畑に「除染」と書かれた大きなビニールの袋が数多く置かれている光景、避難解除になっていない地域は、家の窓ガラスが割れ、荒れ果て、誰一人とも会わない体験は、まことにすきだものでした。このような地域を近くにかかえている南相馬市で、バッハの音楽が演奏されることは、“特別な時”として、お互いの心に深く残るに違いありません。いよいよ来年からは、2015年8月22日の演奏会へ向けての集中練習が始まります。心して、練習に臨みたいものです。

合唱ツアー参加者募集 概要

南相馬公演では、バッハのカンタータ2曲とモテットを日本語で歌います。われわれの魂そのものである母語によって、聴き手のこころの奥深くへ、バッハの生きたメッセージをお伝えしましょう。みなさまのご参加とご同行をお待ちします。練習開始は2015年1月10日より。

◆ツアー概要

2015年8月21日(金)～22日(土)(1泊2日)

1日目：早朝ツアー本隊移動(都内⇒南相馬、チャーターバス)、被災地を知る(市内・海岸)、現地の方々との交歓会、宿泊先へ。

2日目：午前会場準備、リハーサル。午後本番、移動(南相馬⇒都内)。集合/ピックアップ/解散場所など未定。

◆経費

参加費(公演費用、企画経費などの分担金35,000円前後)と個人経費(交通・宿泊・食費など計20,000円前後)を予定。概要・経費とも詳細は立案中。

◆練習日程/会場

<土曜日>荻窪教会 15:30～17:30、1月10日より毎週。

<月曜日>目白聖公会 18:30～20:30、1月19日より毎週(ただし、月曜日が祭日にあたる場合の練習は休みです)。

◆入団金/団費月額

練習参加と本番出演には、入団の手続きが必要です。入団金3,000円、団費5,000円(月額)。

◆お申込み・お問い合わせ

東京バッハ合唱団事務局(月報タイトル囲み内参照)

《マニフィカト》4曲の挿入曲

「高きみそらより」、「よろこび歌え」、「グローリア」、「エサイの花なる」

教会カンタータより3曲のコラール

「わが魂 帰れ」(BWV 97より)、「楽の音 ひびかせ」(BWV 36より)、「いざ来たりませ」「ほめよみ父を」(BWV 36およびBWV 62より)

12月13日の第111回定期演奏会のために準備中の曲の一部を、さいわいな偶然から、都内の人気のスポット、下北沢のお祭りのただ中に、クリスマスのキャロリングの雰囲気でご披露することができました。

来年の東北公演に向かって周囲と接触を始めたところで、このイベントのインフォメーションが入り、今回の「マルシェ」の意図も「東北復興応援!!」とうたわれていますので、私たちの12月13日定演の「3.11被災地へ贈る…花束」のねらいとぴったり重なります。またマルシェ会場となるカトリック世田谷教会には、当合唱団の団員のお一人が所属していて、聖堂の使用を神父さまに打診してもらうこともできました。関根神父にお目にかかり、ご快諾をいただき、その足で同じく下北沢のマルシェの事務局にうかがい、協賛出演の話し合いを経て、それぞれのホームページやフェイスブックでの相互リンクも組めました(「下北沢あおぞらマルシェ」を主催するNPO法人Agri-Connectionsは「農を軸とした市民活動チーム」でフェアトレードなどを実践)。

聖堂の下の広場では、ところ狭しと雑貨や食品の屋台がならび、いろいろなエンタテインメントが繰り上げられていましたが、その頭上から「高きみそらより」の歌声がただよって(この有名なクリスマス歌を、開演のお誘いとして、野外でアカペラで披露)、明るい驚きに打たれた人びとも多かったそうです。

当日の合唱団出演者は、急の呼びかけにもかかわらず25名、小高い丘の上の聖堂に約30名の聴衆をお迎えしました。短い時間の演奏でしたが、アドヴェントの昂揚を満喫していただけたのではないのでしょうか。関根神父さま、マルシェ事務局の荒川淳一郎さん、いろいろありがとうございました。

カトリック世田谷教会で、ミニコンサート

「下北沢あおぞらマルシェ」に協賛

急遽きまって実現された、下北沢のカトリック世田谷教会での特別演奏会。

11月24日(月・祝日)、午後3時(30分の演奏)

合唱：東京バッハ合唱団

オルガン：風岡和子(団員)

指揮：大村恵美子

<曲目> J.S. バッハ(日本語演奏)



■開演前の聖堂
(左手のオルガン脇で演奏)



■丘の上の「洗礼者聖ヨハネ聖堂」
(写真：団員の千葉さん提供)